

## ハツケヨイと二人羽織

遠藤 一秀

かつて働き方の一つとして、徒弟制度や奉公制度というものがあつたことは広く知られています。それらがどんなものであつたのか、私も直接見知っているわけではなく、本で読んだり、祖父の世代から聞いたりしたことが知識のベースですが、いまの時代でも参考になる部分があると思つています。たとえば、「仕事は習うより慣れる」とか、「仕事は先輩の背中を見て覚える」とか、あるいは、「仕事は教わるより盗め」といった言葉の中に込められたメッセージを、読みといてみるのも意義のあることではないでしょうか。ここには、言葉で簡単に伝えることがむずかしい技能を、身に付ける際の心構えが集約されているように思われます。もちろん、徒弟制度や奉公制度につきものであつたとされる、上下関係や先輩後輩関係の厳しさをもつて、非近代的、封建的と断ずる人もいることは承知しています。何事にも両面がありますので、こういう見方をされても致し方のない面があつたことは、おそらく事実でしょう。ここでは、それを議論しようというわけではありません。かつて技能と呼ばれたものと、いま技術と呼ばれるものとの間に、違いはあるのか、違いがあるとすれば何か、それを自社工場の現場において就労している障害者社員に即して考えてみようというのが、今回の主旨です。

当社は、自動車や電気機器等にかかる金属部品の表面処理を主な業務として行っています。行っている表面処理の大

半は、電気亜鉛メッキと呼ばれるものですが、メッキ自体は、全自動亜鉛メッキ装置がつかさどります。この装置は、一列にすると一〇〇m近くになるラインを楕円形に設置したもので、治具(ハンガー)にかけられた部品類を順次、自動的に溶液槽から次の溶液槽に送りながら、亜鉛メッキしていきます。駆動機構や送致機構を持つという点では、機械装置ではありますが、制御機構や動力機構という点では電気装置でもあります。また、溶液槽の中で起きていることは、電気化学的反応であり、その点では化学装置でもありません。機械・電気・化学とくれば、まさに近來の技術が集約されたものと言えます。ですから、この装置だけで当社の仕事が済めば、完全オートメーション工場ということになります。ただし、この装置は当社の主力ではありませんが、(全自動といえども作動状況は常時監視しなければならぬことを除いても)その前後の工程をヒトが担わない限り、主力となり得ないものです。たとえば、装置投入前の、メッキする部品の治具への引掛け作業、そして装置から送出された後の、処理済み部品のメッキもれ・メッキむらを点検しつつの回収作業です。ここで、メッキ装置だけに注目すれば、技術の成果ということになります。前後の工程に注目すれば、多分に技能の集積ということになります。

通常、約二〇〇年前の産業革命以降は、技術文明の時代と、学校で習ったりします。いわゆるテクノロジーの時代というわけです。では、それ以前はどうなるのでしょうか。歴史の本では、産業革命初期の工場制手工業の前段階は、家内制手工業↓問屋制家内工業とされています。この家内工業について書かれたものを見ると、技術

より技能という言葉が多用されています。実際の作業の中心が、職人による「手仕事」であり、生産に道具を必要とする場合も、その使いこなしに「熟練」を要したからでしょうか。「家内制」についてはいまでも、地域性の強い、機械化の難しい工芸品等の生産形態を指すとき、たまに使われますが、「技能」という言葉は昨今、「スキル」に置き換わった感じがします。それも、カタカナ語にすることで、「技能」のときより使われ方がゆるやかになり、使用範囲が広がっている印象を受けます。

前置きが長くなりましたが、古くからある「技能」という言葉で指してもよいようなものが、現在でも、そこかしこに残っていることを、先ず言いたかったためであります。特殊なものとしては、地域工芸品等を製造する場や、伝統芸能を継承する場などが上げられるでしょうが、当社のような、いわば町工場でも、「技能」と呼びたいものが、工程の中にあります。端的には、前記したように、メッキ装置前後の作業です。当社では、これら作業の多くを障害者社員が担当していますが、慣れた社員が従事している姿を見ると、簡単そうに思えてしまいます。しかし、実際従事してみるとわかりますが、どこにより注意して掛かったらよいか、それなりに熟練と根気を要します。いまではひとり立ちしている社員たちも、当初、中には泣きべそをかく者もいたくらい、徹底した反復訓練を受けて、今日に至っています。これは、技能習得のためだけではなく、安全重視と、労力の浪費防止とをかねた訓練でもあります。

この訓練の中から私がたどり着いた指導法の一部が、部品のハンガー掛けにおける、「ハツケヨイ」と「二人羽織」です。「ハツケヨイ」とは、ご存知のように、相撲用語であり、両力士が仕切りを終えて、取組むために立会う、まさにそのときに行司が発する掛け声ですが、その瞬間的な力士の姿勢がハンガー掛けに適しているのです。下半身をしっかりと安定させた上で、上半身は、力士が取組相手に正面から向かっていくときのように、正面のハンガーから目を外さず、部品入りの容器を手に持ってハンガー向かっていく体勢をとる、これをハンガー掛け作業の基本姿勢として、新人には指導しています。ハンガーは、サイズでいえば、枠なども含めて、おおよそヨコ六〇cm×タテ一四〇cmの平板な金属製ネットのようなものです。ハンガー自体を、ラインの架線に掛けたら、引掛作業用の架台に架けた場合、その高さは一七〇cm以上になったりしますが、ネット部分は床上二〇cmから一四〇cmぐらいにとどまります。ハンガーを見たことのない方に、強いて連想してもらおうとすると、台所の壁に取り付けてその引掛具におシャモジやおタマなどを吊るすホーローのネットを思い出していたかとよいかも知れません。ハンガーには、部品を引掛けるための突起が付いており、微小部品用で七〇〇個、大型部品用で三〇〇個を掛けることができます。ハンガーが引掛作業の主用具なので、部品引掛作業を、ハンギングと言ったり、吊るし作業と言ったりもします。

さて、この引掛作業ですが、中々細やかな配慮を要する作業です。日常的に処理を委託されている部品類は、

数百種類にのぼりますし、そのサイズ・形状も様々です。一見同じ形状の部品かと思っても、注意して見ると、空けてある穴の位置が少し違っていたり、片や右側に反っているのに対し片や左側に反っていたりといった具合です。長年のライン管理で、混同しやすい部品同士が混ぜこぜにならないよう、処理にインターバルを設けたり、仕掛品置場での隔離を心がけていますが、それでも油断は禁物と折りあるたびに再確認を促しています。また、全く同じ部品でも、掛ける向き次第では、メッキ槽の中で隣同士が触れ合うこともありますし、一つ置きに掛けるべきところをすき間なく掛けてしまい、隣同士が触れ合うこともあります。いずれもメッキ不良の原因になります。このような部品に関する注意点を念頭に置きつつ、さらに気をつけなければならないことが、「ハツケヨイ」をはじめとする姿勢のとり方です。姿勢が悪いまま長時間、同じ作業をしていると、身体にも良くないですし、必ず能率も低下します。どうせなら、より疲労をためずに、同じ作業成果をあげたいものです。そのための「ハツケヨイ」であり、また、部品入容器をかかえた手と、引掛けをする手とを常時、引掛突起の一〇cm近くまで持つて行く「両手仲良く」です。このほか、要注意なのが、ハンガーの下部に部品を引掛ける際の姿勢です。脚は伸ばしたまま、腰を折り曲げて上体だけで引掛けにかかるとう、腰を悪くしますし、内臓にも良くありません。この場合も、相撲の体勢が参考になります。仕切りの時のソソキヨ(蹲踞)の姿勢です。ヒザを折り曲げて全身を低くしますが、顔と上体はしっかり相手を見つめる、あの体勢です。

ところで、「ハツケヨイ」とともに、部品引掛作業にかかる訓練の初期から導入しているのが、「二人羽織」(にんばおり)です。「二人羽織」というのは、この頃あまり見なくなりましたので、若い人の中には知らない人もいるでしょうが、かつては寄席や宴席の余興としてよく演じられた芸です。一枚の羽織の中に二人が重なって入り、袖(そで)に手を通した後ろの者が、手を使わない前の者にソバをすすらせたりするものです。歌舞伎で俳優の演技を介添えする者や、人形浄瑠璃(にんぎょうじょうり)で人形使いをする者のことを、黒装束(くろしょうぞく)を着ていることから黒子(くろこ)と言いますが、二人羽織の場合、いわば後ろの者がこの黒子に通じる役回りもやっているわけです。作業の仕方を二人羽織式で教える場合、もちろん羽織は着ませんが、後ろの者が教える側で、前の者が教えられる側になります。ほんものの二人羽織のように身体を密着させませんが、後ろから指導する者は、言葉のほか、両手をフルに駆使して、前の者の手の運びが順当にいくよう手を添えたり、頭や身体の向きを正したりします。必要に応じて、ヒザやヒジの折り方、すり足の仕方、腰の下ろし方などを実演してみせます。はじめに「仕事は習うより慣れる」という先人の言葉を引きましたが、危険と隣り合わせの工場ラインにおける作業に関し、時間とともに慣れて自然と危険予知できるようになるまで待っているわけにはいきません。どうしても当初は反復指導と、日課としての訓練が必要になります。そのための「二人羽織」ですが、黒子役だけでなく、実演も織り込みますので、このときに実演者の背中を見て学んだり、実演者の手や身体の動きな

どから必要なものを盗んでもらえたらと思います。

いまではベテランの域に達した障害者社員の一部は、この引掛作業での熟練が技能のベースとなって、日によっては回収作業にもコンバートされたり、その日の引掛作業における部品種別毎の段取り組みまで分担できるようになっていきます。ひとつ技能で自信をつけたものがあると、周囲へ目を配る余裕も出てきますし、それこそ、人から技能を盗まれるぐらいになりたいという欲が出てくる好例です。

相撲と二人羽織、日本古来の武道と演芸のほんの一部を応用させてもらった作業実習法ですが、先人が長年培った技能の中には、応用の仕方次第では、現代技術をもとにした機械装置の前後あるいは周辺で十分生かせるものがあるということの証明の一つにはなっているかと思えます。今後も、「ハツケヨイ」と「二人羽織」をはじめめて応用したときの初心を忘れず、障害者社員にやさしい実習法や工程づくりに努めていきたいと考えています。